
王子と教育係。

ミズマ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と教育係。

【Nコード】

N0914Z

【作者名】

ミズマ。

【あらすじ】

イードレッド王国王子バートラムとその教育係のお話。年頃になった王子のために、教育係は嫁探しの世界一周旅行を企画しますが……。

当ブログにて公開後、転載になります。

「と、いうわけですので。殿下には今から世界一周旅行へと旅立っていただきます」

この教育係とはもう十年以上の付き合いになる。

唐突でいきなりでなんの脈絡もなく、更に強引なのは毎回の話。だがそれにしたって、今回の仕打ちは一体何なんだ？

「と、いうわけってのは、どーゆうわけなのか、ロビン先生」
最初っから説明してくんない？

イードレッド王国の第一王子であるバートラムは、いつもの学習室でいつもの席に着き、いつものように頬杖をついている。

「なにつて『ドキ 美乳爆乳ポロリもあるよ！？ トキメけ！ 殿下のお嫁様探しで世界一周大作戦ッ！』ですよ」

ばんばん、とロビンが叩く黒板には確かに、カラフルでポップな字体でそうでかどと書かれている。

「や、先生が、さっき一生懸命それを書いていたのは知ってるよ。見てたから」

そうじゃなくって。

「どうしてそうなるのか、教えていただきたいんすけど？」

ぎっ、とイスを斜めに傾げたバートラム。王子というよりも不良学生と言った方がしっくりくる。

いつもの昼下がりの学習の時間。広い学習室にはいくつも机とイスが設置されているが、それが埋まっているのはバートラムが座るひとつだけ。それもいつものこと。城内に住む子弟らが参加するはずの教室であるが、その出席率は地の底を這っている。

随分昔に設えたはずの机はほとんど全部が使われた形跡もなく、真新しいまま。

ただひとつ、バートラムが毎回座るイスの座席は磨り減り、毎回使う机は落書きや傷でいっぱいになっている。

彼が毎回この教室に出席する理由は、それが王族たるものの義務だからだろう、とただひとりの教師役であるロビンは思っていた。

一対一で、彼には色々なことを教えた。

世界の歴史や諸外国の言語、テーブルマナーや権謀術数まで。東洋のボン・サイという庭園技術は、さすがに教えなくとも良かったかも知れない（バートラム本人はそれが一番お気に入りのようなのだが）。

だからなのだろうか。

本来、社交性に溢れていなければならない王子という立場にあるこの少年は、大層生意気で口数の多い、へらへらとした不良もどきに育ってしまった。

昔はあんなに素直でかわいかったのに！

「殿下」

ロビンは重々しく口を開く。

「今年でお幾つになれますか？」

「えーと、十七、かな？」

「そ・れ・な・の・にッ！」

身をよじって絶叫する。

「未だ、婚約者はおるか、恋の噂のひとつも無い！ 全くの皆無！ 胸のひとつも揉んだ噂すらないというのは一体全体どういうことなんですかッ！？」

不良目指すなら、乳ぐらい揉んどくべきでしょうが！

「そんなこと言われても」

無然とするバートラムに、ロビンはびしり、と指を突きつけた。

「王族としての勤め、言ってごらんなさい！」

有事の際、国民のために首を差し出すことでしょ、と言いたかった。だが、たぶん今求められている答えは違うだろう。

「後継者をつくる、こと？」

「その通り！」

ハイ正解——！ 正解者にはあめ玉をあげましょうねえッ！

「だというのに！ その義務に対して殿下はまっつつつとく注意を払われておいでにありません！ 宮廷にはいつくらでも胸の大きな年頃の娘がゴロゴロ転がっているのに、ですよ！」

バートラムの手にコロン、と落とされたのはピンクの水玉模様の大きなあめ玉。とびきりうまいわけではないのだが、なぜだかくせになる味。

思えば、正解する度にロビンからもらえるあめ玉目当てに、毎日毎日通っていたような気がする。

「なあ、このあめ玉ってどこで売ってんの？」

「……ホントにあなたは、いつまでたってもひとの話を聞くつてことを覚えませんよね」

それで、どうして立派に王子なんて役職が務まってるのかすごい不思議です。

「そりゃ、先生の仕込みが良いオカゲなんじゃない？」

「お、おだてたつて無駄ですからね！」

「町で探してもさー、売ってないんだよね、このあめちゃん」

「そりゃあ、私の手作りですから」えへん。

「え、そうなの？ すごいね、ロビン先生」

「ええまあ、嗜みとしてこれぐらいは。……じゃなくつてえッ！」

ばしん、と机に両手を叩きつけるロビン。

「毎日毎日、町へ行ったり部屋や庭で昼寝したり……パーティーや舞踏会やサロンやらへ顔出して、とつとと適当なお嬢さんゲットしてくれば良いものを！」

殿下が女性にまったく興味を示さないのは、なにか面白可笑しい理由があるんじゃないかって皆が噂していること、承知していないわけではないんでしょうに！」

一気に捲くし立てるロビン。だがバートラムはその勢いに動じず、淡々と聞く。

「先生は、ソレ信じてんの？」

「ちゃんちゃら可笑しい噂など、どうでもよろしい！」

「……先生も、ひとの話聞かないよね」

「いいですか！　ここ王都を皮切りに、ぐるっと領内外を問わず世界一周していただきますからね！　手筈は既に整えてあります。美乳から爆乳まで、プリンちゃんと噂される高貴な姫君との面会の段取りもバッチリですよ！

当然、父君である陛下のご了承済み！　旅仕度も万全、供の者はすでにスタンバっております！　あとは殿下が行かれるのみ！　あ、あくまでも視察目的の巡回、という名目ですので、それをお忘れなきよう」

ぺこり、と優雅に一礼。

バートラムはそれを一瞥。

「……なんで胸」

「お好きでしょう？」

「嫌いじゃないけど」

「胸は女性のセックスアピール！　嫌いな男子などいるわけがないのです！」

ぐぐツ、と拳を握るロビン。

「で」

「で、とは？」

「先生は行かないの？」

「あのですねえ、殿下」

肩を落とす。

「もう十七にもお成りでしょうに。この歳でまだ教育係が必要って、どんなボンボンなんですか、あなたは」

はあ、とロビンは息を吐いた。

「ええ、そうです。私はお供致しません。と、いうかですね、陛下と話合いまして、お暇をいただきました。実際生徒はあなたひとりでしたし。あなたがいなくなれば、私がここにいう意味もなくなります。」

元王子の教育係という肩書きがあれば、雇い先は選り取り見取り。

すでに私がここを辞めると聞きつけた方々からはオフォーがきますので、私のことはご心配なきよう」

「……へえ」

「でーすーからッ！ とつと旅立って下さいませ！」

爛々と燃える目をしたロビンとやる気のなさそうなバートラムの半眼が絡まる。それを先に逸らしたのはバートラムの方であった。

がたん、とイスをならして席を立つ。つかつかと歩く王子は、いつの間にかロビンよりも長身になっていた。

「じゃあ、行くけど」

「殿下」

「なに」

ロビンは姿勢を正した。

「恐らく、もうこうしてお会いできる機会はないでしょう」

「そだね」

「どうか、立派な王とお成り下さいね。バートラム殿下であれば偉大な王と成られること、信じております」

「あんまし、期待しないで」

真摯な言葉に打たれ斜め下に目を向けるバートラム。ロビンは笑った。

「殿下が立派になられたら、教育係としての私にもハクがつくというものです」

「あ、そう」

じゃあね、と、まるでいつもと同じように別れの挨拶をして、バートラム王子は出て行った。

また、明日も学習室にすれば会えるような気軽さで。

「……………」

だが、彼は行ってしまった。

二度と、もう手の届かないところへ。

「さ、さて。ここも片付けなければ！」

ロビンはスカートを翻して本や実験器具、その他わけのわからない諸々を詰め込んだ戸棚へと向かう。もう使うことのない、この数々の道具を木箱にしまってしまわねばならない。

ロビンの脳裏に、バートラム王子と一緒に勉強した日々が浮かんでは消えていく。

かれこれ十年。

彼女が教育係として王城へ上がって、もう十年経つ。

ただの地方貴族の末娘であつた彼女は十一歳という若さで王城の教育係となつた。それは彼女がその歳では驚くほどの秀才であつたからでもあり、「歳近い者の方が学習嫌いの王子には合うだろう」という期待もあつた。

バートラム王子は確かに手強かつた。手を変え品を変え興味を持たせる授業を行つたし、餌付けのためにあめ玉まで作つた。彼はなかなか心を開いてくれなかつた。

でも、楽しかつた。

楽しかつたのだ。

つん、と鼻の奥が痺れる。

そうして彼と私は大きくなつた。ここで、ふたりきりの教室で。私にとって、ここは楽園だつた。

木箱に機材をしまう手が、止まる。

だめ。

もう、だめ。

でも……もう無理。

こらえるなんてもう無理。

ここは楽園だつた。楽園だつたの。

バートラムと私だけの。彼との唯一の場所。

手の届かない存在。彼が王子だつて最初に出会つたときから知つていた。知つていたのに。

ロビンの頬に、雫が流れる。

私はただの教育係。だからいつも長い髪をまとめ、首まで隠す暗い色のドレスを着ていた。伊達メガネまでかけた。年頃になっても、華やいだ装いなどしたことはない。実家に帰省したときも、オールドミスのような服装は変えなかった。

自分を戒めるために。

私は、立てないのだと。

王子の横には、立てないのだと。

「……」

無性に、胸が痛かった。

「ああ……」

膝から力が抜けた。

涙が抑えられない。

「ああああ」

ずっと好きだった。

ずっと、ずっと好きだった。

身分が違つと分かつていた。そんなことを想うだけで、不敬罪にあたるような行為だと、ちゃんと分かつていたのに。

近すぎて辛いから、無理矢理に離れた。

自分の手に入らないものを、見せつけられているような気がした。これ以上近くにいたら、どうにかなってしまいそうだった。死にそうに、辛かった。

すぐに誰かのものになってくれれば良いのに、とずっと思っていた。そうしたら諦めもつく。誰のものにもならないのに諦めるのは、……納得できなかつた。だから旅立たせた。

諦めたい。もう、こんな想いは捨ててしまいたいのに。

「うああああああ」

とめどなく、涙は落ちる。

もうここにはいられない。いたくない。

ここには想い出が多すぎる。

二度と戻らない想い出。

好き。

好きなの。

大好きなの。

忘れるなんてできない。

この涙と一緒に、私の命も流れ尽きてしまえばいい。

「なんで泣いてんの？」

「ッ!？」

永遠に止まるはずがないと思っていた涙が止まった。

伊達メガネを振り払い、ひつつめた髪も振りほどいて泣き崩れていたロビン。濃い色の長いドレスの裾はぐちゃぐちゃで、いつものとりつくスキもない淑女っぷりは見る影も無い。

驚いた顔で戸口を見る彼女は、実に無防備だった。

「……へ？」

「間抜けな顔」

「……バートラム？」

「そーだよ」

開いた扉に体を預けたバートラムは、いつものようにひょうひょうとした態度で口を開く。

「正解者にはあめ玉をあげたいけど、生憎持っていないんだよね」

「なんで、ここに？」

「王都を皮切りに、って言ったの、先生だろ？」

言ったかも知れない。

でも、なんでどうしてここにまた戻ってきたりしているのだろう？

「忘れ物、とか？」

「ある意味、そうかも」

バートラムはロビンの前へ跪くと、彼女の両手を恭しく捧げ持った。

「結婚してくれないか」

愛してる。

最初に会ったときから、ずうっと。

バートラムはそれからじつくり数分、ロビンの反応を待った。
微動だにしない彼女。

あ、やつぱし唐突すぎた？

こんなときでものん気な彼が、内心で焦り始めたとき、

「わーッ！？」

愛しい彼女は突然奇声をあげる。

捧げ持たれた両手を振り払い、すつくと立ち上がる。

「なんで！？　なんでいきなりそんなこと言うんですか！？　頭で
もイカレた？」

「いや、本気」

「ばーかーじゃーなーいーのッ？　あんた一応仮にもこの国の王子
でしょ？　王子ってとは次の王様になるってことでしょ？　だった
らお嫁さんなんて選り取り見取りの好き放題じゃない！　なんで選
りによつてこんな冗談言うの？　全ッ然、笑えないんですけど！」

「だから、本気だつて」

「それは気の迷い！　こんな、寂れた地方領主の娘で、年上で、不
美人で、しかも貧乳の女に、なにが悲しくってそんな、……け、結
婚の申し込みみたいな真似するなんて、ちよつとウツ入ってるだけ
の気の迷いでしかない！」

「ねえ、先生」

ちよつと落ち着こうよ。

「もうあんたとは無関係ですから！　気安く先生なんて呼ばないで
いただけますか！」

「ロビン」

ぎくり、と体が止まった。

声ではなく、彼の呼びかけに全身の細胞が返事をしたように。

「じゃあ名前で呼ぶよ。それならいいでしょ。仮にも王子だし。敬称なんてつけなくてもいいよね」

バートラムの声はまだ少し高い。でも優しいアルトの声は、一部王城女中の間では「声だけで腰が砕ける」と絶賛されている。

そんな情報がロビンの脳内を駆け巡った。

ああ確かに。女中さんたちの言うことは正しい。全面的に認めますとも！

「ロビン」

「は、はいッ!？」

再び両手を取られる。

ロビンは立ったまま、バートラムは跪いたまま。

「オレは、ロビンがいいんだ。ロビンじゃなきゃ嫌なんだ」

「だからそれは気の迷いで」

「だったら十年間ずっと気が迷ってることになる。十年も迷ったままだったんだ。これから先もずっとそうさ」

彼女はそれに答えられない。

「さっき、なんでひとりで泣いてたの？」

「それは……」

「言って」

「や、です」

「泣かせたのは、オレだよ」

そんなこととても言葉に出来なくて、ロビンはとうとう小さくかすかに頷いた。

「ロビン」

「は、い」

「プロポーズを、受けてくれるだろうか」

どうか、「はい」と言って。

だがバートラムの願いは聞き届けられなかった。
なぜなら

「うう」

「？」

「うわーん！」

「あ、おい、ちょッ!？」

先程とはまた別の意味で、ロビンの涙腺が決壊したからであった。当然、彼女は泣き止みそうにない。

甘い。
了

（後書き）

強がって泣いちゃうヒロイン、大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0914z/>

王子と教育係。

2011年12月3日15時56分発行